

中国語短期語学留学の10年を振り返って

永井智香子
楊曉安

1. はじめに

2006年9月に始まった中国北京の北京教育学院への3週間の短期語学留学は2015年に10回目の実施となった。筆者らは毎回引率教員として学生とともに北京教育学院の宿舎に滞在し(引率は前半を永井、後半を楊が担当)、常に北京教育学院の担当者や中国語教員と話し、プログラムをよくするために、また、問題があれば解決するために、互いに協力してきた。2015年の8月末日、筆者らは北京で、北京教育学院の担当者らと話し合いを持った。その際に、北京教育学院の学長の変更にもなう留学生政策の方針転換により2016年以降は学生の派遣ができないことが明らかになった。10回とぎれることなく学生の派遣が続いたのは、北京教育学院が学生の派遣先として、常に学生が充実した留学生活を送れることを考慮してくれるところであったからである。学生への帰国後のアンケートなどからもわかるが、一人として参加したことを後悔した者はいない。また、この10年間の間には尖閣諸島問題などにより、日中関係が危機的状況に陥ったときに遭遇したこともあった。その際の北京教育学院の危機管理への対応も非常に迅速で確実なものであった。

『長崎大学留学生センター紀要第19号』に「5回の中国語短期語学留学を振り返って」と題して2006年から2010年までの5回の中国語短期語学留学についてまとめたことがある。それを見てもわかるが、多少の増減はあったが、5回目までは順調に参加学生数がのびている。しかし、その後、2011年をピークに参加学生数は激減した。

本稿では参加学生が減った理由の分析や、日中関係が悪化したとき具体的に危機管理がどうであったのかということに触れつつ、10回の短期語学留学を振り返ってみたいと思う。

2. プログラムの概要について

長崎大学では学部生は中国語、韓国語、ドイツ語、フランス語の中から初

習外国語、いわゆる第二外国語として一つ選び、週に1コマ90分を2年生の終わりまで4セメスターにわたって履修することが義務付けられている。中国語を選択した学生は中国語Ⅰ（1年生前期）、中国語Ⅱ（1年生後期）、中国語Ⅲ（2年生前期）、中国語Ⅳ（2年生後期）を履修することになる。本稿で紹介する北京教育学院への3週間の派遣プログラムは、中国語Ⅲを終えた学生が対象である。2年次の夏休みに北京教育学院で3週間中国語を学び、最終試験に合格した者は最後の単位である中国語Ⅳの単位が得られる。したがって2年生後期に中国語Ⅳを履修する必要はなくなる。

2-1 派遣先である北京教育学院について

北京教育学院は教員養成大学であると同時に現役教員の再教育を担っている大学でもある。1998年より外国人に対する中国語教育を始め、短期、長期さまざまなプログラムを開講し、アメリカ、フランス、韓国、ロシア、日本などから多くの留学生を受け入れてきた実績がある。

場所は北京の西北部に位置しており、近くに大きいバスターミナルがあることから、元々立地条件はよかったが、4回目までは最も近い地下鉄の駅まで歩いて20分から30分ぐらいかかった。2008年の北京オリンピック以降、毎年行くたびに地下鉄の新しい路線が増えたり、駅が増設されたりしていた。2009年の9月末に地下鉄4号線が開通し、北京教育学院のすぐ近くに動物園前駅ができた。2010年以降の短期語学留学参加学生は地下鉄を利用し、北京市内であれば、以前よりも簡単にいきたいところに自由に行けるようになった。

2-2 プログラムの内容について

プログラムの内容は大きく分けると①中国語の学習②文化のクラス③交流プログラム④見学プログラムの4つに分けられる。

中国語の学習は午前中の9時から12時に行われた。授業は非常に実践的で、少人数で行われた。実践的な授業の一つの例は毎回必ずプログラムの最初のほうに行われる物の値段を値切る練習である。教室で値切り方を教わったあと、実際に道聞きをしながら卸売市場に行って買い物をし、だれが最も値切ることに成功したかを競わせるという授業であった。

2015年度の場合、参加学生数が17名であったため、2クラスに分けられ

る可能性は低いと思われたが、2クラスでの実施となった。この10年間、常に参加学生らは1クラス10名前後という恵まれた環境で中国語を学んできた。媒介言語はほとんど使われず、中国語で中国語を学ぶという環境の元、学生らは急速に聞く力や話す力を上げていった。ほとんど毎年学生らは最後に中国語劇をしなければならなかった。中国語で台本を作り、衣装、演技などについて考え、演じるということを通じて中国語力を上げようというものである。

文化のクラスは、午後2時から3時半まで行われた。年によって多少の変化はあったが、だいたい、太極拳、中国の歌、切り紙、中国画といった具合であった。

交流プログラムとして、中国人大学生との交流会、中国人家庭訪問があった。中国人大学生との交流会は年によって1回のときもあれば、2回のときもあった。1回は一緒に水餃子を包みながら、また、ゆであがった水餃子と夕食を食べながらの交流会であった。中国人家庭訪問は3、4人という少人数にわかれて中国人の家庭を訪問するというものであったが、事前に家族にインタビューをする練習が教室で行われており、学生らは訪問した家庭の家族にいろいろ聞き、翌日のクラスでそれを報告するというタスクが与えられていた。

見学プログラムは毎年ほぼ、万里の長城、頤和園、故宮博物院・天安門・王府井で、芸術鑑賞として雑技の鑑賞があった。10年間を通じて最も学生にインパクトを与えたのは万里の長城であったことが帰国後のアンケートからもわかる。筆者らも引率教員として何度か同行したが、その壮大な規模に圧倒される。

2-3 住環境と食事

外国人への中国語教育をおこなう北京教育学院の国際語言文化学院のキャンパスは同じ北京市内ではあるが、メインキャンパスとは離れたところにある。やや狭い敷地内に留学生寮、教室、留学生事務室、食堂、体育施設などがある。長崎大学の学生は国際語言文化学院のキャンパスに滞在するため、日常的に、多くの中国人学生を見かけたり、食堂を共有するという事はなかった。中国人学生と同じ教室で勉強することはなくても、中国の大学の雰囲気味わうことができなかつたのは唯一プログラムの残念なところであつ

たと言えるだろう。

留学生寮であるが、二人一部屋で、部屋の中にはベッド、机、椅子、トイレとシャワー室がある。寮の入口には管理人室があり、24時間体制で管理人が常住していた。この10年間盗難などは一切なかった。エアコンや電気の不具合、蚊の発生など何かあると迅速に対応してくれたことは有り難かった。毎年、帰国後のアンケートで、寮についての評価は高かった。

食事は3食バイキングで決められた時間に食堂に行って食べるようになっていた。2015年度のみ、3食とも食堂で食べられたのは最初の1週間だけで、残りの2週間は食事が提供されるのは中国語の授業がある日の朝食と昼食のみであった。これは中国の物価上昇によるものであったが、学生らにとっては却ってよかったようである。北京は物価高であるとはいえ、場所を選べば食事は比較的安い。学生らにとって、自由に行きたいところで食事をするという経験がよかったことは帰国後のアンケートからうかがえる。

2-4 合意書と参加費用について

北京教育学院は教育学部が主管部局の長崎大学の協定校であるが、短期語学留学の実施のために北京教育学院国際語言文化学院と長崎大学国際教育リエゾン機構（2013年9月までは留学生センター）の間で合意書が結ばれた。合意書は3年に一度更新された。

合意書に明記された参加費用であるが、第6回目までは5000円であった。2回目の更新の際、つまり、2012年からは5500円となった。首都の北京では物価が高騰していたからである。この参加費には中国語の学習、文化のクラス、見学プログラム、宿舎費、食費が含まれていた。学生は参加費用相当金額を日本円で持っていき、北京到着の翌日銀行へ行き、換金し、北京教育学院に支払った。

元での支払いであるので、当然為替レートの影響を受ける。この10年間の為替レートの変動は大きかった。第1回目から第3回目まではだいたい1円が15円程度で、学生には参加費は約7万5000円であると伝えていた。その後、円高となり、第7回目までは1円が13円程度で学生の負担は7万円を切った。8回目から急速に円安が進み、10回目はついに1円は20円程度となり、学生の負担は約11万円となった。これに航空機代、保険代、小遣いを加えると学生の総負担額は20万円を超えた。欧米への短期語学留学に比べると参加

費用の安さが「売り」であったが、そう言っていられない状況となってきたのである。最近では奨学金なしでは参加は不可能という学生も多い。10回の学生派遣の経験を通じて、あらためて、留学というものがいかに為替レートの影響を受けるかということを実感している。

奨学金の獲得状況であるが、JASSOの奨学金は、2015年に9名（一人6万円）、2014年に6名（一人6万円）、2012年に35名（一人8万円）、2011年に35名（一人8万円）であった。その他、2014年までは一人8万円の県費奨学金を2、3名が毎年獲得していた。さらに、2014年より、長崎大学の奨学金制度がスタートし、2015年に7名（一人6万円）が獲得している。為替レートの変動はあるが、奨学金の存在は常に非常にありがたいものである。

3. 10年間の参加学生数の推移

表1を見ていただきたい。この10年間の実施した日程と参加学生数を示したものである。

	日程	参加人数
第1回	2006年9月2日(土)～9月23日(土)	8名
第2回	2007年9月1日(土)～9月22日(土)	18名
第3回	2008年9月6日(土)～9月27日(土)	14名
第4回	2009年8月27日(木)～9月17日(木)	25名
第5回	2010年8月28日(土)～8月18日(土)	42名
第6回	2011年9月3日(土)～9月24日(土)	48名
第7回	2012年8月31日(金)～9月21日(金)	38名
第8回	2013年9月4日(水)～9月25日(水)	15名
第9回	2014年8月22日(金)～9月12日(金)	9名
第10回	2015年8月29日(土)～9月19日(土)	17名

表1 過去10年間実施した日程と参加人数

表を見ると第6回目、2011年の参加者がピークであることがわかる。2011年は留学参加予定者49名が決定したあと、35名分のJASSOの奨学金（一人8万円）が獲得できたことがわかった。学生募集のための留学説明会においてまったく奨学金に触れていなかったため、学生にどう伝えるか、正直困

惑した。結局、急遽参加予定学生を全員集め、事情を話し、中国語の奨学金選抜テストを行った。幸い奨学金支給者に選ばれなかった学生もほとんどキャンセルした者はいなかった。

翌2012年は38名と参加者が10名減っているが、これは実質上の減少ではない。というのは、次のような理由があるからだ。その年も前年同様35名分（一人8万円）のJASSOの奨学金が獲得できていた。その年は参加募集を始める前からそのことがわかっており、留学説明会で参加希望者が35名を超えた場合は奨学金選抜テストを行うことを明確に学生に伝えていた。結果は、51名もの学生が選抜テストに参加した。テストの結果、奨学金支給対象者に選ばれなかった者のほとんどは参加しなかったのである。

2013年に参加学生が激減している。やはり、尖閣諸島問題の影響が否めないと思われる。2012年9月11日に日本政府はそれまで私有地だった尖閣諸島を国有化した。その結果、中国各地で反日デモが発生し、その様子はマスコミを通じて日本にも報道された。そのような状況を目にすれば、学生は元より、親が中国へ行くことを許さないだろう。それに追い打ちをかけるように2013年には鳥インフルエンザの問題もあった。さらに、PM2.5に関する深刻なニュースも伝えられていた。2013年度は短期語学留学を実施するかどうか長崎大学で話し合いが持たれた。その結果、5月に筆者らが急遽北京へ行き北京教育学院側と実施の有無について話し合い、実施が決まった。その年は参加者が激減しているが、15名というのは筆者らにとっては予想を越える人数であった。

2014年度はさらに参加学生が減る。5月に留学説明会を実施してもほとんど学生は来なくなった。ピーク時には教室からあふれるほどの学生が説明を聞きに来ていたことを知っているだけに、愕然とした。2回の説明会の結果、申し込んだのは7名であった。2次募集を行い、さらに2名が追加され、9名となった。当時、引き続き日中関係の悪化は続き、PM2.5の深刻なニュースも伝えられていた。しかし、参加学生が少ないのはそれだけではないと思われる。その頃、大学には徐々にグローバル化の波が押し寄せ、グローバル人材という言葉もよく聞かれるようになっていた。長崎大学も日本人学生の派遣プログラムを増やしつつあった。学生側から見ると留学の選択肢は多くなったことになる。かつては中国短期語学留学の場合、経済学部の学生が7、8割を占めていたが、ここ数年は少ない。経済学部の学生が「最近は以前

とは違い、学部の留学情報の掲示板に留学案内が非常に多く貼られている」と話していたことも裏付けているのではないだろうか。

2015年は17名と増えているように見えるが、これは増加とは言えない。なぜなら、17名のうち10名が2014年度から学生の受け入れを始めた新学部、多文化社会学部の学生だからである。多文化社会学部は語学、特に英語の教育に力を入れており、中国語のクラスも他学部に比べて多い。学生には語学に興味を持っている者が多く、10名という多くの参加があったのである。

4. すぐれた北京教育学院の危機管理体制について

4-1 通常の危機管理体制

この10年間、危機管理に関する事故や事件が発生しなかったのは北京教育学院の危機管理体制が非常によかったからだと言える。北京教育学院は留学生の危機管理に重きを置いている。その体制は国際語言文化学院が学院の上層部の命を受け、保安部の協力を得ながら責任を負うというものである。さらに、学長や理事は常に留学生の危機管理に気を配っている。その結果、留学生の日常生活の安全は保証されていた。

留学生が滞在する国際語言文化学院のキャンパスの具体的な危機管理体制についてであるが、まず、正門横の守衛室に常に警備員がおり、すべての外来者を厳しくチェックしている。外来者は身分証明書を提示するとともに来校理由を明確に伝えなければ入れない。正門は毎晩11時に施錠される。もし何らかの事情があり、11時以降に戻る場合は前もって、引率教員を通じて伝えておかなければならない。また、キャンパス内にある留学生寮の入口には管理人室があり、24時間体制で安全管理にあたっている。その他、見学プログラムなどで外出する際、筆者らに加え、2、3名の北京教育学院の引率教員が同行し、常にグループ全体に目を配っている。

4-2 2012年9月の尖閣諸島問題発生時の危機管理体制について

有事のときに、その危機管理体制の良さがより顕著になった。たとえば、2012年9月の尖閣諸島問題のときである。表1からもわかるが、2012年は第7回目で、38名が北京に派遣された。日程は8月31日から9月21日であった。9月11日に日本政府がそれまで私有地だった尖閣諸島を国有化すると発表した後、中国各地で激しい反日運動が起こったのである。日程的に見ると、

留学が後半にさしかかった頃である。その時の北京教育学院がとった危機管理に関する特別措置は以下のようなものであった。

1. 北京教育学院の危機管理を担う校務委員会では留学生の安全をいかに守るかということに関して9月11日以前から数度に渡って緊急会議を開き、その対策について話し合っていた。その結果を受け、学長や理事は全力をあげて留学生の安全を守るよう国際語言文化学院に指示をした。

2. 9月18日は満州事変の始まりとなった柳条湖事件が発生した日で、毎年反日に敏感となる日である。その年は9月18日前後には危機管理活動の一環として、北京教育学院の保安部の部長が連日国際語言文化学院のキャンパスで警備活動にあたった。

3. 見学プログラムとして万里の長城と頤和園へ行くとき、引率教員の数が増員された。通常は引率教員の数は2、3名であるが、万里の長城へ行った際は5名の引率教員に加え、保安部の職員4名が警備にあたった。頤和園へ行った際も引率教員の数は5名であった。

4. 正門の警備体制が強化された。前述のように平常時も外来者は自由に入れない体制がとられているが、この時はそれに加え、安全面を考慮して、帰国まで留学生が自由に外に出ることも禁じられた。長崎大学の学生がスーパーへ買い物に行くときは4人一組となり、必ず長崎大学の中国人引率教員と行くことが義務付けられた。

5. 自由に外に出ることが禁じられたことによる、学生たちのストレスを軽減するために北京教育学院は急速、京劇メイク、太極拳、中国歌曲のクラスを増設することを決定した。

以上のような危機管理体制がとられた結果、その年の帰国後の学生へのアンケートには否定的な記述は一切なかった。

4-3 2015年抗日戦争勝利70年の軍事パレードが行われた日の危機管理

体制について

軍事パレードが行われたのは9月3日であった。その日、長崎大学の学生は一日中外出が禁止された。買い物は引率者同行であれば許された。その結果、筆者は何度か学生の買物を引率することになった。帰国後のアンケートにこの日のことについて次のような記述があった。「9月3日は抗日戦争から70周年の記念式典とのことで、宿舎からの外出を禁止された。確かに日中関係は決して良好とは言えないが、そこまでかこの身で、この目で体験することができた」。

5. 終わりに

10年間で234名の学生を派遣してきた。234名全員が行ってよかったと思える留学プログラムであったと言える。否定的なことが帰国後のアンケートに書かれているのを見たことがない。また、学生が留学について否定的なことを言っているのを耳にしたことがない。毎年帰国後のアンケートの記述欄に多くの参加学生が書くことがある。それは実際に外国に行って、異文化を肌で感じることの大切さに気付くということである。今年の記述にはたとえば「中国に対する偏見が払拭される。中国の良いところを知ることができる」「中国に対するステレオタイプの印象が良かれ悪かれ変わるので価値観の違いを学ぶためにも行く価値はある」というようなものがあつた。たとえ短期間の留学であっても、筆者らは留学というものの計り知れない効果を感じている。

2016年から西安の西北大学に学生を派遣すべく準備を進めている。北京教育学院同様長く続けられる、参加学生全員が満足できる留学プログラムとなることを願って止まない。

(永井：国際教育リエゾン機構 准教授)

(楊：言語教育研究センター 教授)

参考文献

永井智香子 (2007) 「第1回中国語海外短期語学研修実施報告—参加学生が書いたアンケートとレポートを中心に」『長崎大学留学生センター紀要』第15号 pp.17-28

中国語短期語学留学の10年を振り返って

永井智香子（2011）「5回の中国語短期語学留学を振り返って」『長崎大学留学生センター紀要』第19号 pp.21-33